

音楽と言語

吉永誠吾

Music and Language

Seigo YOSHINAGA

(Received November 14, 1996)

Music and language have much in common. When we consider how music should be taught at school, it seems to be significant to know the process of language acquisition. Music itself is a language in which we can share our emotions with the people. We can tell them our thoughts with words, but we can't share our emotions with only these. Feelings such as laughter, anger, sorrow and anxiety, we can convey how deeply we feel with the help of facial expressions. Of course, emotion should be expressed correctly. It is true that children study language at school, but they are not taught to express their true feelings. Therefore, music education plays an important role in helping the people to express their own feelings. When we assume that music is a language to express feelings, this will bring out the problem of music education in Japan full relief. Accordingly, in this paper, I suggest how music education should be taught considering the development of musical talent comparing this to the process of language acquisition.

I 音楽的能力とは何か

はじめに

音楽と言語の間には、極めて多くの共通点が見受けられる。したがって、音楽教育の在り方を考える場合に、人間が言語能力を習得するプロセスを参考にしながら考えることは、極めて有意なことである。そもそも音楽とは感情を相手に伝える言語ではないだろうか。人間は言葉で自分の考えを相手に伝えることができるが、その思いの深さまでは伝えることはできない。怒ったり、泣いたり、笑ったり、要するに感情を表情に表すことによって、その思いの深さを相手に伝えるのである。しかし、感情は上手に伝えられなければならない。ところが、子供達は学校で言葉を勉強しているが、感情を伝えることは学んでいない。そして、音楽こそ感情を伝える手段として最も大きな役割を担っているのである。すなわち、感情を伝えるコミュニケーションとして音楽を考えると、現在の日本の音楽教育の問題が浮き彫りにされてきそうである。したがって、本稿では、音楽の才能の現れ方と人間が言語能力を習得して行くプロセスを比較しながら考えることによって、音楽教育のあるべき姿を探っていこうと考えている。

1 音楽的能力とはなにか

音楽的能力とは何であろうか。ここでは一応いくつかの学説を取り上げる。

(1) シーショアの説

シーショアによれば音楽の才能は単一のものではなく、相互に全く独立しており、しかも自然にグループを作っている。それを分類するには二つの次元が考えられる。ひとつは音の属性であり、他は人間の一般に認められている能力である。それを表にすると表1のようになる。シーショアはこれらの才能がバラバラに集まって音楽的心性を形成するのではなく、総合されたパーソナリティとしてあらわれることを強調してはいるが、一面「これらの能力のおのおのは独立した部分として、感覚のみならず、記憶、想像、思考、感情、行為などすべてを貫いている」として、基本的感覚の優位を認めている¹⁾。

(2) シェーンの説

シェーンは音楽的能力という語の代わりに、音楽適性という語を使う。音楽適性 (musical aptitude) は鑑賞能力に対する音楽性 (musicality) と、演奏能力に対する才能 (talent) に大別される。両者は補足的な関係にあり、音楽性が高いほど演奏もよくなる。

表1 音楽的心性の要因 — シーショアによる音楽的能力の分類 —

[SEASHORE 1919]

I 音楽的感受性		II 音楽的行為
A. 単純な印象形	B. 複雑な印象形	正確な、音楽的に表現豊かな音の創造（声や楽器、あるいは両者による）の技能に対する自然的能力
1. 高さの感覚	1. リズムの感覚	
2. 強さの感覚	2. 音色の感覚	
3. 時間の感覚	3. 協和の感覚	
4. ひろがりの感覚	4. 量の感覚	1. 高さの統制
		2. 強さの統制
		3. 時間の統制
		4. リズムの統制
		5. 音色の統制
		6. 量の統制
III 音楽的記憶と想像	IV 音楽的知性	V 音楽的感情
1. 聴覚表象 (imagery)	1. 音楽的自由連想	1. 音楽的好悪
2. 運動表象	2. 音楽的反省力	2. 音楽に対する情緒的反応
3. 創造的表象	3. 一般知能	3. 音楽における情緒的自己表現
4. 記憶範囲		
5. 学習能力		

表2 シューンによる音楽才能の目録

[SCHOEN 1940]

一次的要因	二次的要因
聴覚的感受性	知能
音楽的感情と理解	音楽的記憶
音楽的技量	意志力と決心
	自信
	気質

後者の才能については表2のような目録を掲げている。シーショアにはなかった意志力や自信、気質などを加えているところに彼の特徴が見られる²⁾。

(3) メーンの説

メーンは他の心理学者のような理論的考察ではなく、実際の調査に基づいて、音楽能力 (Musikalität) の内容を明らかにした。その調査は2452人に対する質問紙から得られた資料によっている。その質問は18項目よりなり、「あなたは音楽的ですか」、「楽器をやりますか」、「曲を聴いてすぐそれがなにか分かりますか」、「2声の低音部を歌えますか」、「作曲しますか」、「絶対音感がありますか」、「他の芸術的才能がありますか」などである。その結果は表3のよう

であった。また、その音楽性と音楽的行動の関係は表4のようになった。

この調査の中でメーンは非常に音楽的な人が100%近くできて、非音楽的な人がほとんどできないような行動を探し出したところ、「2声が歌える」こと、すなわち低音部のパートが歌えることがそれに相当することを見出した。「2声が歌える」のは、非常に音楽的な人の96%、音楽的な人の86%、やや音楽的な人の67%、音楽的でない人のわずか6%、となっていて、音楽的であるかないかを弁別するのに都合のよい妥当性のある特徴となっている。しかし、これに反してリズム感などは音楽性を弁別するよい特徴とはいえないようである³⁾。

(4) レベスの説

レベスは音楽能力を先天的素質と、すでに出来上がっている才能に分けている。そしてさらにその才能を二つに分けて、創造的作曲的才能と再生的解釈的才能と名づけている。作曲家は創造的作曲的才能を示したのに対し、演奏家は再生的解釈的才能を示す。一般的に名演奏家で作曲家としても重要な地位を占めている人が少ないのに対し、作曲家で演奏がうまかった音楽家の方が多い⁴⁾。

表3-1 音楽的能力の段階 (2452人の内訳)

[MJØEN 1926]

非常に音楽的	音楽的	やや音楽的	音楽的でない
15%	33%	30%	22%

表3-2 音楽性と音楽的行動の関係 (N=2452) [MJØEN 1926]

	全被験者 %	非常に音 楽的な人 %	かなり音 楽的な人 %	やや音楽 的な人 %	音楽的で ない人 %
作曲できる	4	33	1	0	0
絶対音感がある	11	55	22	3	1
暗譜で弾ける	25	85	42	11	1
2声ができる	36	77	49	19	1
2声が歌える	60	96	85	48	6
メロディ模唱	62	96	86	67	9
メロディの記憶	65	100	94	75	14
リズム感	68	98	95	78	39
楽器演奏	70	99	93	89	24
メロディの正誤判断	71	100	98	81	22

表4 音楽性と音楽的行動の関係 (N=2452) [MJØEN 1926]

	非常に音 楽的な人 %	かなり音 楽的な人 %	やや音楽 的な人 %	音楽的で ない人 %	計
作曲できる	92	8	0	0	100
絶対音感がある	51	42	6	1	100
暗譜で弾ける	42	44	13	1	100
2声ができる	35	47	17	1	100
2声が歌える	26	48	24	2	100
メロディ模唱	18	46	33	3	100
メロディの記憶	21	46	29	4	100
リズム感	18	40	32	10	100
楽器演奏	19	43	34	4	100
メロディの正誤判断	16	46	32	6	100

(5) ランディンの説

ランディンはシーショアなどの音楽的心性に対するアプローチを退け、能力は具体的な反応にあらわれるとした。たとえば、聴いたメロディや和音をすぐ正しく書けることや、メロディに和声の法則により和音をつけることや、リズムを正しく演奏し書くことなどはどの音楽家にも共通に要求されることであろう。しかし、同じ音楽家であっても、作曲家、演奏家、理論家により異なった行動が必要で、一概に音楽家全体の特性などを言うことは出来ない。例をあげるならば、音程の細かい差を聞き分けることはバイオリニストには必要であるが、ピアニストには必要ではない⁹⁾。

2 天才とは何か

天才あるいは神童として引き合いに出される最も有名な音楽家はモーツァルトであろう。そしてこのモーツァルトと同じタイプで、神童がそのまま世界的な音楽家になった例として、ヘンデル、メンデルスゾーン、サン＝サーンス、R・シュトラウス、ヒンデミットなどがあげられるであろう。また、仮にその才能がモーツァルトほどではないにしても、並外れた才能をもち、加えて一生懸命の努力を続け、世界的な音楽家になった人として、バッハやベートーベンがあげられる。いずれにしても、彼らの才能に共通して話題となるのは、遺伝と家庭環境である。彼らの才能は、彼らがほぼ十歳前後には既に顕著なものとなっており、その他の歴史に残る音楽家たちも、その大部分が彼らが幼いころからその才能を現している。このことが他の芸術、例えば文学、詩、美術などの才能の現れ方と、音楽の才能の現れ方を区別している特徴である。もちろん、優れた画家や彫刻家の中には幼いころから並外れた造形感覚や色彩感覚を示した者もいたであろう。しかし、子供のころからの才能がどうであったかということに関していえば、他の芸術では音楽におけるほど大きな話題にはならない。むしろ、音楽の才能の現れ方は言語能力の発達に酷似しているといえそうである⁹⁾。

II 言語能力の習得

1 言葉を習得するということ

ここではひとまず、遺伝の問題は置くとしよう。鈴木慎一氏の指摘を待つまでもなく、私たち日本人は何の疑いもなく当たり前日本語を話している⁹⁾。外国人にとってみれば日本人は全てまさに日本語の天才に見えるのではなからうか。筆者の見解では日

本語はあらゆる言語の中でも非常に難しい言語に属すると思われる。なぜなら、日本語には二種類の五十音（平仮名及びカタカナ）が存在するうえに、漢字まで使わねばならない。同じ内容の意味をたったの26文字（若干のプラスはあるが）のアルファベットで表すことができる言語圏の言葉（英語、独語、仏語など）に比べれば、日本語は非常に難しいというのが筆者の考えである。

もちろん、どの言語が難しいかやさしいかなどはここで考える問題ではない。どのような言語であるにしても、人間は無理する事なく当たり前自分の母国語をもち、それを自由自在に使っている。筆者は二度の外国滞在で外国語の学習ということについて、大いに考えさせられた。一言で言えば、外国語の学習は母国語が全く使えないというストレスを経験することによって初めて、大いに実りあるものとなる。島国である日本国内において、そのような経験をすることはまず無いであろう。しかし、車を一時間少々走らせればすぐに国境に来てしまうヨーロッパでは、二つ三つの外国語がある程度理解できるということは、必要なことであって、特に不思議なことではない。

この母国語という概念を音楽に置き換えて考えて見よう。先に例に挙げた大作曲家たちの家庭では、彼らの母国語と同じく、音楽が鳴り響いていたのである。もし仮に、バッハやモーツァルトと同じ環境を全ての人間に与えたとしたら、全ての人間がバッハやモーツァルトのような才能を示すとはいえないにしても、半分くらいは一角の音楽家が生まれても不思議は無いだらう。

2 野生児の記録

ここで思い浮かぶのは野生児の話である。筆者は音楽の才能と言語能力との関係について大いに興味があったので、インドで発見され育てられた「アマラ、カマラの養育日記」及び、「アヴェロン野生児ヴィクトールの発達と教育」を読んだ。その詳しい内容についてはここでは必要ないであろう。もちろん、この物語には、はたして真実であるかどうか疑わしい点が存在する。例えば、四つ足で速く走るとか、暗闇で目が光るとか、腐りかけた生肉を好んで食べるなど常識では考えにくい⁹⁾。その他の、これまで人々の話題に上ったことがある野生児の例も、あるいは単なる自閉症児であったかもしれない。しかし、普通の人間が母国語を習得して行くべき重要な時期に、文明社会から隔離されたものがどのような

状態であったか、またそのような、人間とも動物とも言えない状態のものを、言語能力の習得も含めて人間社会に適応させようとするのがどのように大変であったかを、これらの記録が示しているということは言えるであろう。この野生児の記録は、一方で豊かな文明の恩恵に浴することのできる人間が、このようにもなりうるということを示している⁹⁾。

3 イザベルとヘレン・ケラーの例

次の例は人間の言語能力の習得の問題を考えるうえで、言語というものがコミュニケーションの一つの手段であるという、いってみれば当然のことを改めて教えてくれる。

イザベルの母親は聾啞者であった。イザベルは母親が二十二歳のときに生まれたが、父親はだれか分からない。イザベルの祖父母はこの事件を深く恥じて母子をカーテンのかかったままの部屋に閉じ込めたまま育てた。イザベルはこの部屋で六年半過ごし、すきを見て母親が逃げたのがきっかけで救出された。当然イザベルは全く言語能力を示さなかったが、母親が発見されてみるとこの母子は身振り手振りのコミュニケーションで心を通わせていたことが分かったのである。この後イザベルはもちろん専門の言語治療を受けたが、目覚ましい成長を遂げた。彼女は遅れて小学校に就学し、十四歳で卒業したが、年齢よりはいくぶん小柄である点を除けば、あらゆる点で正常であると評価された¹⁰⁾。

この話を聞くと、ヘレン・ケラーのことが思い出されるであろう。彼女はしかし、一歳八カ月までは正常に育っているのである。しかも彼女は極めて早熟で、六か月ころには片言をしゃべっていたと言われている。サリヴァン先生の努力もさることながら、彼女のそのような優れた資質に加え、たったの一年八カ月の正常な成長が三重苦を克服する奇跡を成し遂げたのであろう¹¹⁾。人間は必ずしも言葉によらずとも、なんらかのコミュニケーションの手段を身につけることによって、真に人間らしく生きていくことができるのであろう。先に例に挙げた野生児達と、この二人の女性は好対照をなしている。

聖アウグスチヌスはその著「告白」の中で次のように述べている。『私はものをよういわぬ幼児ではなく、もう口のきける少年であった。わたしは、このことを記憶している。どうしてもものをいうことを学んだかを、のちに見聞して知ったのである。すなわち、年長者たちが、のちに間もなく文字を教えたときのように、ある一定の教え方によって、わたしに

言葉をあてがって、わたしを教えたのではなく、わたしの神よ、あなたがわたしに与えてくださった知力によって、わたし自身がわたしに教えたのである。そのとき、わたしはさまざまなうめき声や叫び声をだしたり、さまざまに手足を動かしたりして、わたしの心に思うことを示して、わたしの思うとおりにしてもらうことを望んだが、わたしが望んだすべてのことをも、またわたしが望んだすべてののひとも、それを示すことはできなかった。わたしは、記憶をたどって考えてみた。すなわち、年長者たちが或るものの名を呼び、その音声にしたがって、身体を或るものの方へ動かしたとき、わたしは、そのものをわたしに示そうと思うさいには、かれらはその発する音声によってそのものを呼ぶということを見て、覚えた。かれらがそのものをわたしに示そうとするのは、いわば万民共通の自然の言語である身体の動きによってあきらかであった。そしてこの言語は、顔つき、目つき、その他四肢の動き、音声のひびきからできていて、ものを求め、手にいれ、斥け避けようとする心の動きを示すものである。このように、いろいろな言葉がさまざまな文句のうちにしかるべきところでもちいられるのをしばしば聞いて、わたしはそれらの言葉がどのようなものの符号であるかを推知するようになった。そしてわたしの口はそれらのしるしになれてきて、わたしはもう自分が心に思うところをそれらによって告げるようになった。こうしてわたしは、わたしの周囲の人々と、わたしが心に思うことを告げるしるしを交換して、両親の権威と年長者たちの指図とにたよりながら、人生の荒波立つ社会にますます深く進んで行った。』¹²⁾

確かに、人間がこの世に生まれて、いつの間にかしゃべれるようになるということは大いに不思議である。チョムスキーは、子供はある種の言語習得装置 (language-acquisition device LAD と省略される) をもっていると主張する¹³⁾。しかし、聾啞者は手話という手段によってかなり正確にコミュニケーションすることが出来る。さらに、さきに例にあげたヘレン・ケラーやイザベルのような例は、人間の脳が単に言語という手段に限定される事なく、他の考え得る様々な手段を使ってコミュニケーションが出来るようになるのだということを教えている。すなわち、どのようにしてしゃべれるようになるかではなくて、どのようにしてコミュニケーション出来るようになるかということが大切なのである。つまり、もし許されるならば言語修得装置ではなくて、コミュニケーション能力習得装置とよぶべきである。

Ⅲ 音楽の果たすべき役割

1 IQ と EQ

ダニエル・ゴールマンは感情をコントロールできる能力をいわゆる知能指数 (IQ) に対する言葉として EQ (emotional intelligence つまり、心の知能指数、ただし、著者自身は EQ という言葉は使っていない) という概念で表し、それがいかに大切であるかを述べている。考える知性が IQ であるならば EQ は感じる知性である。ゴールマンによればこの EQ とは①自分自身を動機づけ、挫折してもしおとくがなされる能力②衝動をコントロールし、快楽をがまんできる能力③自分の気分をうまく整え、感情の乱れに思考力を阻害されない能力④他人に共感でき、希望を維持できる能力であると言っている¹⁴⁾。

これに先立ち、ハーバード大学教育学部の心理学者ハワード・ガードナーは人間の知性として大別して言語的知性、論理数学的知性、卓越した芸術家や建築家が示す空間的知性、身体運動的知性、音楽的知性、対人知性、心内知性の七種類をあげている。対人知性は他人を理解する能力で、心内知性とは自分自身の内面に向けられる知性である。ガードナーはこの対人知性と心内知性をあわせて人格的知性ともいっている¹⁵⁾。

イエール大学の心理学教授ピーター・サロヴェイはさらにこの人格的知性を EQ に関する基本定義として次の五つの領域に分類している。

- (1) 自分自身の情動を知る…情動の自己認識、すなわち自分の中にある感情を認識する能力
- (2) 感情を制御する…感情を適切な状態に制御しておく能力
- (3) 自分を動機づける…目標達成にむかって自分の気持ちを奮い立たせる能力
- (4) 他人の感情を認識する…いわゆる共感能力
- (5) 人間関係をうまく処理する¹⁶⁾

人間はもともと善人でも悪人でもない。自分自身の感情をうまくコントロールすることができ、相手に上手に伝えることができれば自然に信頼関係も増すであろう。逆に、それができないためにささいな事から悲惨な事件や犯罪が起こっているのである。従来の IQ 偏重ではなく、EQ も大切にする教育は今の我が国の教育にとってこそ考えられなければならない。

2 音楽は何のためにあるのか

偉大な指揮者であったレナード・バーンスタイン

は音楽は感情を表現することであると言っている。彼はまた、特別に深い感情の前には言葉は沈黙してしまうともいい、とても難解な音楽であるはずのウェーベルンの作品を深い感動とともに子供達に演奏して聞かせているのである¹⁷⁾。そうであるならば、音楽は感情のコミュニケーションの最も有効な手段であるといえよう。私たち人類は、共通の大きな文化として言語を学ぶよう義務づけられている。しかし、感情をコミュニケーションする訓練は義務づけられてはいない。この感情の表現がうまくできなかったためにおきた悲惨な事件は人類史上依然として後を絶たない。いまアメリカでは銃の所持問題がやかましく論議されているが、ささいな事から大ゲンカとなり、発砲事件や殺人事件が頻繁に起きている。これらの事件の容疑者や被害者たちがもう少し感情の表現がうまくできていれば、それほど大きな事件にはならなかったと言えないであろうか。言葉が通じてもケンカは絶えない。あれほど悲惨な世界大戦を二度も経験しているながら、戦争は無くならない。人類がもう少し平和に共存していくためには、私たちは感情をコミュニケーションする技術をまなばねばならない。そしてもし音楽が感情のコミュニケーションの有効な手段になりうるならば、音楽はその存在意義をおおいに大きくするといえよう。

音楽が感情のコミュニケーションの有効な手段で有り得るなら、音楽を勉強するという事は感情のコミュニケーションを勉強するという事になるといえよう。もし、そうであるならば、ゴールマンの主張する EQ を学ぶのに音楽こそまさにふさわしいといえるであろう。しかし、そうであれば今の我が国の音楽教育は嘆かわしいの一語に尽きるであろう。このため、筆者らのグループは、特に音楽鑑賞教育において積極的な役割を果たしたいと考え、公立学校や幼稚園、保育園あるいは地域社会のための音楽鑑賞教室 (あるいは移動音楽会) を行っている。このことについてはまた稿を改めて述べたい。

注

- 1) 梅本徳夫著「音楽心理学」、誠心書房、昭和45年3月、p. 418-420
- 2) 前掲書、p. 420-421
- 3) 前掲書、p. 421-423
- 4) 前掲書、p. 423-425
- 5) 前掲書、p. 426
- 6) M・クリッチェリー、R・A・ヘンソン編「音楽と脳Ⅰ」サイエンス社、昭和58年 p. 231-276、なお、モーツァルトに

- ついては p. 232-236, ヘンデルについては p. 242~244, メンデルスゾーンについては p. 250-251, サン＝サーンス, R. シュトラウス, ヒンデミットについては p. 274, バッハについては p. 244-246, ベートーベンについては p. 236-241
- 7) 鈴木慎一著, 「才能開発の実際」, 主婦の友社, 昭和52年1月, p. 15-16
 - 8) 藤永保著「幼児教育を考える」, 岩波新書, 1995年10月 p. 145-153
 - 9) 前掲書, p. 131
 - 10) 前掲書, p. 177-181
 - 11) アン・サリバン著, 榎恭子訳, 「ヘレン・ケラーはどう教育されたか」, 明治図書出版, 1981年10月, p. 10
 - 12) 聖アウグスティヌス著, 服部英次郎訳, 「告白」(上), 岩波文庫, 1995年7月 p. 21-23
 - 13) ジェームズ・ディーズ著, 片山嘉雄他訳, 「心理言語学」《増補版》, ナカニシヤ出版, 1984年1月, p. 80, および, デレック・ピッカートン著, 笈壽雄他訳, 『言語のルーツ』, 1985年4月, p. 142
 - 14) ダニエル・ゴールマン著, 土屋京子訳, 「EQ～こころの知能指数」, 講談社, 1996年8月, p. 61
 - 15) 前掲書, p. 66-67
 - 16) 前掲書, p. 74-75
 - 17) ここの引用はパーンスタインが子供達のために長い間行ってきた「young people's concerts」の中で述べており, 実際には彼は「音楽は感情を引き出すことである」と言っている。ウェーベルン作品の演奏もこの時に行われた。